

「主、われを愛す」

マタイによる福音書 4章 1～4節

聖学院大学 政治経済学部長 高橋愛子

聖句: マタイによる福音書第4章第 1-4 節

- 01 さて、イエスは御霊によって荒野に導かれた。悪魔に試みられるためである。
- 02 そして、四十日四十夜、断食をし、そののち空腹になられた。
- 03 すると試みる者がきて言った、「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんさい」。
- 04 イエスは答えて言われた、『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの^{ことば}で生きるものである』と書いてある」。

秋学期が始まりました。二ヶ月近い夏休みを、皆さんはどのように過ごされたでしょうか。いまままだ厳しい残暑がありますが、着実に秋は深まっているようです。「読書の秋」と言われるように、心を落ち着けて「読むこと」や「考えること」「学ぶこと」に最も適している季節の到来です。一人ひとりの内的な成長の実りが豊かにあることを願っています。

さて、今日の礼拝は「心に響く聖書の言葉」が奨励テーマであるシリーズ礼拝の一つだとキリスト教センターから伺った時、真っ先に心に浮かんだのが、先ほど読んで頂いた聖書箇所イエスキリストの言葉、「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの^{ことば}で生きるものである」という聖句でした。「パン」という言葉は文字通り、私たちが日々、「食べるもの」であると同時に、「お金」や「地位」「名誉」「権力」などの言葉に置換えても真理であろうと思います。

また、悪魔がイエスを試そうとして近づいてきた、と書かれています。悪魔という言葉は、実は聖書には何度も出てくるのですが、本当に悪魔が存在するのだろうか、と疑わしく思うかもしれません。しかし悪魔の存在の有無をさておくとしても、歴史や私たちの社会に溢れるニュースを見れば、私たち人間はしばしば、必要以上の贅沢な豊かさや地位、名誉、権力を求めようという「誘惑」によって人生の道を誤ってしまうという事例に事欠くことがないという現実があります。しかしイエスキリストは、こうした誘惑に身を任せても、人間の魂は真に^{やす}休らうこと、満たされること、生きることはできない、そうではなく「神の口から出る一つ一つの^{ことば}」が私たちを生かすのだ、というのです。

じつは若い頃には、私自身この言葉の意味を理解することはできませんでした。しかし数十年の人生を生きて来る中で、どんなに食べるものや生活に必要なすべてが整っていても、思いがけずに襲ってくるさまざまな困難や試練、不安、失望に遭遇すると、「生きる力」が失われてしまうのだという現実と直面し、「神の口から出る一つ一つの^{ことば}」が「生きること」の根底を支えるのだということ、身をもって知るようになってきました。

そうした中、これまでの人生の折々に、人生の先輩たちから「聖書の言葉」を贈られてきたことの^{とうと}尊さに気づき、最近では、若い友人たちが悩みを打ち明けてくれるような時、「言葉を贈る」ということを心がけるようになったのですが、聖書の中には、宝物となる^{ことば}言の数々が満ちているのです。

そこで今日は、「心に響く聖書の言葉」としてふたつの聖句を取り上げ、皆さんとその「^{ことば}言」をじっくりと味わうことができればと願っています。

最初に取り上げるのは、「愛」という言葉が数多く出てくることで有名なヨハネの第一の手紙の中の第4章第7節から第12節です。

7 愛する者たちよ。わたしたちは^{たがひ}互に愛し合おうではないか。愛は、神から出たものなのである。すべて愛する者は、神から生まれた者であって、神を知っている。

8 愛さない者は、神を知らない。神は愛である。

9 神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、私たちに對する神の愛が明らかにされたのである。

10 わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。

11 愛する者たちよ。神がこのようにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも^{たがひ}互に愛し合うべきである。

12 神を見た者は、まだひとりもない。もしわたしたちが^{たがひ}互に愛し合うなら、神はわたしたちのうちにいまし、神の愛がわたしたちのうちに全うされるのである。

8 節に、「神は愛である。神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、私たちに對する愛が明らかにされた」とあるのですが、以前、——ずいぶん昔のことになりますが——この箇所は、「神が愛である。神がそのひとり子を世につかわし、～」というように、「は」ではなく「が」と訳すべきところである、という聖書講話を聞いたことがあります。同じく第4章にはもう一箇所、16 節に「神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます」とありますが、ここも「神が愛である」と訳されるべきである、というのです。その時以来、私の聖書には、この二箇所に「が」と書き入れてあり、「神が愛である」という^{ことば}言に何度も支えられ、生かされる経験をしてきました。

では、愛そのものであるという存在を、私たちはどのようにして知りうるのでしょうか。愛そのものが神の性質であるということですが、そもそも愛とはどのようなことなのでしょう。その一つの例として、旧約聖書の詩篇の中で謳われているある詩人の言葉の中に、詩篇第139篇の詩の中に、一つの手がかりを見

ることができるように思うのです。これがふたつ目の聖句です。

詩篇第 139 篇 1—16 節: 少し長いですが、途中を省略しながら読んでみます。

- 1 主よ、あなたはわたしを探り、わたしを知りつくされました。
- 2 あなたはわがすわるをも、立つをも知り、遠くからわが思いをわきまえられます。
- 3 あなたはわが歩むをも、伏すをも探り出し、わがもろもろの道をことごとく知っておられます。
- 4 私の舌に一言もないのに、主よ、あなたはことごとくそれを知られます。
- 5 あなたは後ろから、前から私を囲み、私の上のみ手をおかれます。
- 6 このような知識はあまりに不思議で、わたしには思いも及びません。
- 7 わたしはどこへ行って、あなたのみたまを離れましょうか。わたしはどこへ行って、あなたのみ前をのがれましょうか。
- 8 わたしが天にのぼっても、あなたはそこにおられます。わたしが陰府^{よみ}に床を設けても、あなたはそこにおられます。
- 9 わたしがあげぼのの翼をかって海のはてに住んでも、
- 10 あなたのみ手はその所でわたしを導き、あなたの右のみ手はわたしをささえられます。
- 11 【中略】
- 12 【中略】
- 13 あなたはわが内臓をつくり、わが母の胎内でわたしを組み立てられました。
- 14 わたしはあなたをほめたたえます。あなたは恐るべく、くすしき方だからです。あなたのみわざはくすしく、あなたは最もよくわたしを知っておられます。
- 15 わたしが隠れた所で造られ、地の深い所でつづり合わされた時、わたしの骨はあなたに隠れることがなかった。
- 16 あなたの目は、まだできあがらないわたしのからだを見られた。わたしのためにつくられたわがよわいの日のまだ一日もなかった時、その日はことごとくあなたの書にしるされた。

以上が、詩篇第 139 篇の聖句です。

遠くに離れていても、これほどまでに、私たちの一人ひとりのことをじっと「見ている」方がいて、いつすり、いつ立っているか、いつ行動し、いつ眠っているか、そればかりではなく、まだ一言も言葉を発していなくても、その心の奥底の思いを「知っておられる」、そのような方として、第 139 篇の詩人は神を讃美しているのです。

たとえ地の果てにまで行っても、神さまの目から逃れようとしても、そこに共におられ、私たちの存在を支えて下さるというのです。さらにすすんで、まだ地上に生み出される前に、母の胎内で新たな命の存在が創造される時から、一日も地上での命が始まっていない時から、その創造を「見て」「知って」おられた、という驚きの声を詩人はあげています。

この詩篇の言葉も、わたしの心に深く刻まれた、心に響く聖書の言葉の一つです。私たちが何か別なことに没頭しているような時も、神から離れて逃れようと別の道へ突進しているような時さえも、神は私たちをじっと見守りつづけ、それゆえ、私たちは「神に知られている存在」なのだと、神を讃美しています。愛とは、私たちがどこに居ようと何をしようとも「じっと見えて下さること」「知っていて下さること」、

そして、だからこそ、谷底にあっても共にいて下さり、支えて下さる、そのような方として、神がつねに傍らにいてくださる、ということなのではないでしょうか。

このような愛は、たとえ恋人でも夫婦でも親子でもできることではありません。しかし愛そのものである神は、その証として、ひとり子イエスさまを私たちの元に送り届けて下さり、罪の許しの福音を告げ知らせて下さいました。だから私たちは「神から知り尽くされている自分」「神に愛されている自分」を知ることができ、安心して、失敗を恐れることなく、人生を歩んでゆくことができるのです。

それでは、お祈りいたします。

在天の私たちの神様、本日、こうして秋学期の始まる時、「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言^{ことば}で生きるものである」というイエスさまの言葉を心に刻み、聖書の言葉に思いを馳せながら、礼拝を守るひと時を与えて下さいましたことを感謝いたします。「神が愛である」というヨハネの手紙の言葉、そして、数千年の時を超えて、はるかな距離を超えて旧約聖書の時代の詩人が神を讚美する言葉を通し、あなたこそが愛である、という聖書の指針に思いを深めることができました。私たちが願いや苦しみを言葉にするずっと前から、あなたはそのことを「知っておられ」、じっと目を注いでくださっていることを教えられました。

詩篇第 139 篇の詩人と共に、計り知ることのできないあなたの愛を讚美いたします。たとえ小さな聖書の一節であっても、一人ひとりが、人生を根底から支えて下さる「聖言^{みことば}」に出会うことができますようにと祈ります。

感謝と祈りを主イエス・キリストの聖名^{みな}を通してお捧げいたします。アーメン

2019年10月4日 聖学院大学 全学礼拝シリーズ礼拝「心に響く聖書の言葉」